

2011 年 一般社団法人日本社会福祉学会学会賞 受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2011 年の学会賞が決定し、第 59 回秋季大会期間中の 2011 年 10 月 9 日に淑徳大学千葉キャンパスにおいて授賞式が行われました。

学術賞は秋元美世会員（東洋大学）の『社会福祉の利用者と人権—利用関係の多様化と権利保障—』（有斐閣 2010 年 3 月 30 日）が選ばれ、奨励賞として、単著書部門からは吉田仁美会員（昭和女子大学）の『高等教育における聴覚障害者の自立支援—ユニバーサル・インクルーシブデザインの可能性』（ミネルヴァ書房 2010 年 6 月 30 日）が、奨励賞の論文部門からは、大谷京子会員（日本福祉大学）の『精神保健福祉領域におけるソーシャルワーカー—クライアント関係に関する実証研究—「ソーシャルワーカーの自己規定」「対象者観」「関係性」概念を用いて—』（『社会福祉学』第 51 巻 3 号 2010 年 11 月 30 日）が選ばれました。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。

◆ 学術賞 ◆ 秋元 美世 会員

この度は、栄誉ある日本社会福祉学会学会賞（学術賞）を幸運にもいただくことができ、大変うれしく思っております。まずは、ご推薦いただいた先生をはじめ、審査にあたっていた諸先生、そして学会の皆様方に心よりお礼申し上げます。

さて、拙著（『社会福祉の利用者と人権：利用関係の多様化と権利保障』）の「あとがき」でも触れさせていただいたのですが、「生存権は物盗りではない」（戒能通孝）という言葉と大学院で出合ってから以来、自分にとって人権や権利ということが常に気になるテーマでありました。この本では、人権や権利にかかわってこれまで考えてきたことを、福祉サービスの利用関係をめぐる今日的な状況を踏まえながらまとめようと試みたものです。今回の受賞は、これまで右往左往しながらも続けてきた作業が、決して無駄ではなかったことを確認できたという意味で、非常に感慨深いものがあります。

もう 1 つ、本の中ではその旨を明記しているわけではないのですが、論述に際してこだわっていた点がありました。それは、人権や権利の問題を法律学と社会福祉学の接点となるようなところで論じてみたい、ということでした。社会福祉をフィールドとして見た場合、学際領域と目される社会福祉において複数の学問分野が関わることは当然のことです。法律学においても、こうした観点からの多くの貴重な業績が存在しています。ただ私がこだわろうとしたのは、フィールドとしての接点ではなく、ディシプリンという意味での社会福祉＜学＞との接点です。そもそも権利や人権というのは、社会的な広がりのある観念であり（それゆえ法律学の独占物というわけではありません）、社会福祉における権利や人権を意味あるものとして論じていくためには、ディシプリンとしての社会福祉学の知見が持つ意味というのは大きいと考えられます。ですからこの本では、そうした社会福祉学の知見が含意していることを意識しながら論じたつもりです。

社会福祉の権利や人権について、この本でなにがしかのことをまとめることができたのも、研究会等の場を通じて、あるいは本や論文を通じて、知的刺激と共に様々なことを学ばさせていただいた多くの研究者や実務家の皆さまのおかげだと思っております。そうした方たちに最後にあらためてお礼を申し上げますとともに、今回の受賞を励みに今後とも研究を進めていきたいと考えております。ありがとうございました。



◆奨励賞（単著書部門）◆ 吉田 仁美 会員

この度は、伝統ある日本社会福祉学会の学会賞・奨励賞をいただき、大変光栄に思っております。推薦して下さった先生方をはじめ、審査委員の先生方、役員・事務局の方々、そして私の研究を支援して下さった方々に厚くお礼申し上げます。

受賞対象となった著作（『高等教育における聴覚障害者の自立支援—ユニバーサル・インクルーシブデザインの可能性』）は、私自身が聴覚に障害をもつ当事者であることから出発しています。

その内容については審査委員会の報告書に触れてありますように、高等教育における「聴覚障害者」を対象に、特に「女性聴覚障害者」に焦点を当て、これまで潜在化していた女性聴覚障害者の多様なニーズとその背景について、当事者の視点で顕在化・明確化するとともに、それらに対してどのような自立支援が可能なのか、その方策と実現への可能性を示したものとなっております。高等教育機関において、障害の有無にかかわらずすべての学生に対して、教育とその環境をより良いものに促進する「ユニバーサルデザイン」の概念と、障害をもつ人々を包含し、それぞれのニーズに応じて支援する「インクルーシブデザイン」の概念を統合して「ユニバーサル・インクルーシブデザイン」という新たな概念とその意義を提唱し、人と環境の相互作用の視点から教育の保障と自立支援の必要性を述べたことに特徴があります。私が提示した理論と、聴覚障害者の視点で明示された課題は、高等教育における聴覚障害者のケースに留まらず、健常者の病気や怪我等による一時的な「機能障害」を含め、障害者、子供や高齢者、外国人など、「生活機能の障壁」を体験するあらゆる人々の課題とも連関する普遍性をもつものであると考えています。今回の受賞を契機として、さらなる研鑽を積み重ね、ユニバーサルでインクルーシブな環境の創出に資する研究を今後も進めてゆきたいと考えています。

最後に、このようなオリジナリティある研究を進めることができたのは、なによりも昭和女子大学名誉教授伊藤セツ先生の懇切丁寧な指導によるものであると思っています。この場を借りて改めてお礼申し上げます。



◆奨励賞（論文部門）◆ 大谷 京子 会員

このたびは、日本社会福祉学会奨励賞をいただき、大変光栄に存じております。選考委員の先生方をはじめ、学会員のみなさまに深く御礼申し上げます。

本論文は、私の博士学位論文の一部です。そもそも私の PSW としての 10 年の実践経験から、質の高い PSW 実践のために必要な要件を明らかにしたいと考えたことが、研究の動機です。

本論文は、日本精神保健福祉士協会員 5,595 名を対象にしたアンケート調査結果の一部です。PSW が自らをどう位置づけるかという「自己規定」と、クライアントをいかに捉えるかという「対象者観」、そして PSW とクライアントとの「関係性」を測定する項目群を開発し、「自己規定」と「対象者観」が「関係性」に影響すること、また逆に「自己規定」と「対象者観」は「関係性」から影響を受けることを明らかにしました。ここから、実践を振り返るときのポイント、関係性形成のために留意すべきことなど実践への提言ができたと考えております。ただ、指標の精緻化など、多くの課題が残されております。

『社会福祉学』への掲載を目標にしておりましたが、思いがけず奨励賞をいただき、研



究者としてのスタート地点に立った私には、大きな励ましになりました。思いだけが先立つ私を受け入れ育ててくださった関西学院大学の高田眞治先生、落ち込んだ時も前に進めずにいる時も、常に励まし、支え、ご指導くださった小西加保留先生、統計初心者に粘り強くご指導くださった山口大学の小杉考司先生をはじめ、多くの先生方にご指導いただきました。研究に専念するための学外研究の期間を与えてくれた日本福祉大学にも感謝しています。切磋琢磨しあう博士課程の仲間にも恵まれ、ひたすら苦しい研究プロセスの間、私は孤独ではないことを感じていました。皆さんに深く感謝しています。

これからも、現場に還元できる研究を目指し、努力してまいりたいと思います。